

# “HAND”の認知意味論

日 景 敏 夫

## 1. はじめに

認知科学 (cognitive science) は人間と心の働きについての関係を統合するという新しい分野であり、心理学、言語学、哲学、人類学、コンピュータ科学など多方面の分野に大きな影響を与えている。言語についてのこの方面からのアプローチは「認知意味論」(cognitive semantics)と呼ばれ、Lakoff (1987), Johnson (1987) など数多くの研究者の間で取り組まれている。

認知とは人間が日常生活の中で絶えず行っている意味にかかわる営みのことである。目覚ましの音で起きなければならないことを知る。窓を開けると、空模様から今日の天気を知る。朝食時に食欲がないと、体調が悪いことを知る。こういうことはすべて認知の営みである。しかし人間の認知の営みは、言語を媒介として行われることが最も多いのである。

従来は、言語能力の解明を目標にする生成文法理論では、人間の認知による範疇化を集合と同一視し、ある範疇に属する成員は何らかの属性を共有することを必要充分条件としている。言い換えれば、すべての成員は同じ資格でその範疇に属し、その集合内では各成員は対等なものとしてきた。しかし、認知意味論における範疇では、その成員はすべて同じ資格を有するのではなく、最も代表的な成員(プロトタイプ)から、周辺的な成員にいたるまで、段階的な差があり、周辺部では他の範疇と重複する場合もある。

また認知意味論では、思考ないしはことばと身体性の関連を重視している。人間の概念体系は身体的な経験に由来するものであり、それとの関連で意味を生み出すものである。例えば、「右」とか「左」、「前」とか「後」、「上」とか「下」という概念は人間の身体を基準に作られたもの

である。人間がこの世の中で生きていくにあたり、自分の身体を中心にことばを作り上げていったことは、容易に想像がつく。動詞の範疇にある、「運動動詞」(go, come, move, run, walk, etc.)「知覚動詞」(see, look, hear, listen, remember, etc.)「発話動詞」(say, tell, talk, speak, etc.)などはすべて人間の身体を中心にしている。心理学者ピアジェ (Piaget) は幼児は自分の周囲にある物体を直接手で操作できるのだと知ることによって初めて因果関係ということを経験するのだという仮説を立てた。電灯のスイッチを入れたり、シャツのボタンをかけたり、ドアをあけたりする動作は絶えず日常生活をするうえで不可欠なもので、直接に手で行う操作である。このように繰り返し行われる日常の手を用いる行為は、直接的因果関係の「原型的」(prototypical)なものである。従ってこのような因果関係を言葉で表現することが幼児にとってまず必要になってくるのである。

また、認知は思考と想像力に関わるものである。というのは、経験に直接根ざさない概念はメタファ (metaphor) やメトニミー (metonymy)、心的イメージ (image) などを媒介とするからである。例えば、a hand of the clock, a competent hand, a hand of bananasなどは人間の想像力に根ざすものである。このような想像力の営みがあるからこそ、「抽象的」思考が可能になり、心は人間に見えないもの、感じられないものも経験できるのである。

本論では、認知意味論のアプローチから、人間の身体の代表的な語「hand」の分析を試みるものである。哲学者モンテーニュは「hand」に関して、次のように述べている：

Behold the hands, how they promise, conjure, appeal, menace, pray, supplicate, refuse, beckon,

interrogate, admire, confess, cringe, instruct, command, mock, and what not besides, with a variation and multiplication of variation which makes the tongue envious<sup>(1)</sup>.

(手を見てごらんさい。手が約束し、魅惑し、訴え、脅迫し、祈り、哀願し、招き、尋問し、賞賛し、告白し、媚び、教え、命令し、嘲けりその他もろもろのことを行うさまを。舌を羨ましがらせる、多種多様な行為を。)

上記の言葉はまさに身体の代表的な一部である「hand」と思考との関連が深いことを物語るものである。

## 2. 多義語とプロトタイプ

ことばは通常、多義性を有している。一つの事象に対し、一つのことばを当てはめた場合、この世の中には人間の記憶能力の限界を超えることばが必要である。その欠点を補うものとして、ことばの多義性が存在するのである。多義性は人間の経験する状況間の類似性、近接性に目をつけ、一つの単語でいくつかの状況を表そうとするものである。このように、ある多義語がどのようにして複数の意味を持つようになったかを辿ることにより、人間の認知の仕方が明らかになるであろう。例えば、handの意味は、辞書では次のようになっている。各意味の意味特徴を[ ]で表すことにする。

### 1. [hand] (プロトタイプ)

(人の) 手

*Hand* is from wrist to the finger end.

### 2. [shape]

#### a. (人の手に当たる高等脊椎動物の) 前肢手

I was surprised at the kangaroo's powerful five-fingered *hands*.

#### b. (一般に動物の) 物をつかむことのできる部分: (サルの) 後ろ足

#### c. (葉、果物などの手の形をした) 束、ふさ; タバコの葉の束 a *hand* of bananas

### 3. [pointer]

#### a. 手に似たもの、(時計などの) 針, 指針

The clock has the hour *hand* and the short *hand*.

### 4. [worker]

#### a. (肉体労働・一般的な職務に従事する) 働き手, 労働者, 職工, 職人

I saw many factory *hands* working there.

#### b. (技量, 能力などに関連しての) 人 He is a new *hand*.

#### c. 乗組員

The ship was lost with all *hands*.

### 5. [expert]

特定の仕事をする人; 特殊な手腕を持った人; (ある分野の) 専門家

He is a real *hand* of geometry.

### 6. [skill]

#### a. 仕方, やり口; 手腕, 腕前, 腕, 手際, 技量

I have no *hand* at paying compliments.

#### b. 手さばき

To ride well, one must have good *hands*.

### 7. [possession]

所有, 占有; 権力, 権限; 支配, 管理

He fell into the enemy's *hands*.

Parents have children's fate in their *hands*.

### 8. [situation]

(取り引き・交渉などにおける, 特に支配的) 立場

He took an action to strengthen his *hand*.

### 9. [work]

#### a. (手段・媒介としての) 手, 作用, 働き

She made it by *hand*.

#### b. 援助・助力・手伝い

Give me a *hand* with this ladder.

10. [direction]  
a. 方・側；方向・方面  
There is a grocery store on the right *hand*.
11. [tendency]  
a. 傾向  
He is in the losing *hand*.
12. [letter]  
筆跡，書法，文字  
He writes a good *hand*.
13. [signature]  
署名  
The paper was under his *hand* and seal.
14. [applause]  
拍手喝采  
He won a good *hand* for his playing the piano.
15. [measure]  
手の幅：特に馬の高さを測る単位で 4 インチ  
It was a horse 13 *hands* high.
16. [card]  
持ち札，手  
He held a good *hand*.
17. [turn]  
ゲームの回，イニング  
Mr. Dawkins opened and sixth *hand* he went from 5-3 to 14-3.
18. [smooth]  
(織物の弾性・なめらかさ・きめなど) 手で触れて感じられる性質，手ざわり  
I like the smooth hand of satin.
19. [saucer]  
(情報・供給などの) 出所と考えられる人  
Go and get the information at first *hand*.
20. [player]  
(持ち札を持って) 勝負に加わる人  
He is an elder *hand*.
21. [play]  
一勝負  
Let's play a *hand* at bridge.

辞書の記述方法は、「hand」という範疇の指示対象物(意味)を並列に並べるやり方である。そして、1~21 の項目の相互の関連性がなんら示されていない。一方プロトタイプ理論では各項目間の典型性と連続性が強調される。

例えば「野菜」のプロトタイプ<sup>(2)</sup>は「にんじん」である。「カボチャ」のようなものはプロトタイプから離れたところに位置する。プロトタイプの概念は文化によって異なる場合もある。西欧諸国では「鳥」というカテゴリーを形成する集合体のプロトタイプは、スズメやコマドリであるが、日本ではコマドリがプロトタイプであるという感覚はない。我々の身近に見られる、スズメやハトがプロトタイプである。

[hand] のプロトタイプは他の多義語とは異なり明白である。1. の「人の手」である。この「人の手」というプロトタイプが「メタファ」「メトニミー」そして「心的イメージ」によって、他の語義に拡大されるのである。

G.A. Miller (1978) は語の多義性に関し次のように述べている：

This approach requires two assumptions: a) it is possible to identify central or core senses of polysemous words, and b) it is possible to formulate construal rules governing the ways a core sense can be extended to provide other senses<sup>(3)</sup>.

上記の central or core senses はプロトタイプのことであり、the ways a core sense can be extended to provide other senses とは、メタファやメトニミーなどであると考えてよいであろう。次に上記の辞書の記述をメタファとメトニミーなどのストラテジーを用いて再分類を試みることにする。

### 3. hand とメタファー

語が多義性をもつ主要な原因の一つはメタファである Ulmann はメタファーについて次のように述べている：

Since metaphor is based on the perception of similarities, it is only natural that, when an analogy is obvious, it should give rise to the same metaphor in various languages……A very common form of metaphor in the most diverse languages is the anthropomorphic types<sup>(4)</sup>.

the anthropomorphic types とは人間の身体即ち、「手」「目」「口」「耳」などを用いるもので、メタファの中で最も基本的なものである。例えば、the foot of a mountain「山のふもと」と the foot of a list「リストの末尾」がそれである。このメタファを分析してみると次のようになる。

A is the bottom-most of the body.  
(A は人体の最下部である。)  
X is the bottom-most of the mountain.  
(X は山の最下部である。)  
X' is the bottom-most of a list.  
(X' はリストの最下部である。)  
Body is projected onto mountain, with A projected onto X. [Metaphor]  
人体は山に投影され、A は X に投影される)  
[メタファ]  
Body is projected onto list, with A projected onto X'. (Metaphor)  
(人体はリストに投影され、A は X' に投影される。)[メタファ]  
The word "foot" names A.  
(単語 foot は A の名称となる。)  
A, X, and X' form a category, with A as central member. X and X' are noncentral members related to A by metaphor.  
(A, X, X' は一つのカテゴリーを形成する。A はそのカテゴリーの中心的な成員である。X と X' はメタファによって A と関連を持つ非中心的な成員である<sup>(5)</sup>。)

このように、メタファとは類似性に基づくものである。hand というカテゴリーの中心的な成員(プロトタイプ)である「人の手」からメタファによって派生する非中心的な成員は上記の辞書の記述の中から抽出してみると次のように

なる。なお各成員の意味特徴は [ ] で示すことにする。

2. [shape]  
動物の手、手に似たもの(葉、果物などの手の形をした) 束、ふさ
3. [pointer]  
時計などの針
9. [direction]  
方・側; 方向・方面
13. [measure]  
手の幅: 特に馬の高さを測る単位で 4 インチ

上記の 4 つの意味特徴がすべて対等であるわけではない。この中で最もプロトタイプ(人間の手)に近いものは [shape] である。「人間の手」全体からのメタファだからである。[pointer] はものを指し示す機能を持つ手の下位範疇である「指」からのメタファである。同様に [measure] は手の幅, [direction] は手の位置からのメタファである。その故、プロトタイプからの距離は次のようになる。

[shape]-[pointer]-[measure]-[direction]

#### 4. hand とメトニミー

メトニミー (metonymy) とはある下位のカテゴリーないし成員ないし下位のモデルがカテゴリー全体を理解するために用いられる場合である。言い換えれば、あるものを表現する場合、そのもののすぐに知覚できる一面をとって、それを用いて、そのもの全体を表すことである。例えば日常の言語現象でよく見られる、「牛-頭」「鶏-羽」「魚-尾」などのように「頭」「羽」「尾」という体の一部が全体を指す場合とか、漱石の「坊ちゃん」中の教頭を「赤シャツ」と呼ぶように、着ているもので人間を表すような場石である。

一般的に認められているメトニミーの形式をまとめてみると次のようになる。

1. <原因> によって、結果を表現する。

- 例えば、「結果」として生じる「文字」を「手」で表す場合。  
手紙, 手習い  
He writes a good *hand*.  
(彼は字がきれいだ。)
2. 〈結果〉によって原因を表現する。  
例えば、悲しみの原因を「涙」で表す場合。  
She shed *tears* at the news.  
(彼女はあの知らせを聞いて涙を流した)
3. 〈容器〉によって内容を表現する。  
例えば、酒を「一升瓶」「銚子」、ウィスキーやミルクを「ボトル」で表すような場合。  
She raised a child on the *bottle*.  
(彼女は子供を「母乳でなく」ミルクで育てた。)
4. 〈産地の名称〉によって、内容を表現する場合。  
益子 (焼き), 友禅 (つむぎ)  
Boston (bag)
5. 〈部分〉が全体を表現する場合  
a competent *hand* (有能な働き手)
6. 〈抽象名〉によって具体物を表現する場合  
「かせぎ」→お金, 「にぎり」→寿司  
She married *money*.  
(彼女は金持ちと結婚した。←彼女は金と結婚した。)
7. 情念や内的感情の発生する場所と見なされる〈身体部分〉によって、感情を表現する場合。  
心臓が弱い, 腹が立つ。  
Billy is a *hothead*.  
(ビリーはすぐかっとくる←ビリーの頭はほってている。)
8. 〈製造者・製作者〉が製品を表す場合。  
He bought a *Ford*.  
(彼はフォード (社製の車) を買った。)  
I want to read *Soseki*.  
(私は漱石の [の本] が読みたい。)
9. 〈使われる物〉が使う人を表す場合。  
The *buses* are on strike.  
(バス [の運転手たち] はスト決行中だ。)
10. 〈公共機関〉が責任者を表す場合。

I can't understand the *government's* actions.

(政府 [当局者] の行動は理解できない。)

11. 〈場所〉が公共機関を表す場合。

永田町 (=日本政府) の論理。

The *White House* isn't saying anything.  
(ホワイトハウス [米国政府] は何も言っていない。)

12. 〈場所〉が出来事を表す場合。

Remember *Pearl Harbor*.

(真珠湾 [の奇襲攻撃] を忘れるな。)<sup>(5)</sup>

メタファーは主として類似性 (similarity) に基づいて、あるものを他のもの通し理解する手段である。一方メトニミーは上記の例からも分かるように近接性 (contiguity) に基づくものであり、ある存在物を使って他の存在物を指し示す方法で、修辭的技巧をも含むものである。

「人の手」からのメトニミーは比較的単純で (1) 部分 (手) で全体を表す場合 (2) 〈原因〉によって、結果に表現する場合 (3) 容器で内容を表す場合に限られる。

- (1) 手で人を表す場合。

人間の身体部分はたくさんある。どの身体部分を用いるかによって全体のどの部分にわれわれの注意が集中されているかが決まる。

There are many *good heads* in NASA.

(航空宇宙局にはよい頭 [=知能の高い人] が大勢いる)

We need some *new faces* in the movies.

(映画界には何人か新しい顔 [=新人] が必要である)

head, face で「人」を表しているのだが、それらの人のもつ特徴の中から、頭や顔に関連した特徴である「知能」や「美貌、風貌」を取り上げているのである。同様に、手で人を表す場合は手に関連した特徴である「仕事、技術」を際立たせているのである：

3. [worker]

- a. (肉体労働・一般的な職務に従事する)  
働き手, 労働者, 職工, 職人

I saw many factory *hands* working there.

- b. (技量, 能力などに関連しての) 人  
He is a new *hand*.
- c. 乗組員  
The ship was lost with all *hands*.
4. [expert]  
特定の仕事をする人; 特殊な手腕を持った人; (ある分野の) 専門家  
He is a real *hand* of geometry.
16. [saucer]  
(情報・供給などの) 出所と考える人  
Go and get the information at first *hand*.
17. [player]  
(持ち札を持って) 勝負に加わる人  
He is an elder *hand*.
- (2) 原因によって結果を表す場合。
10. [letter]  
筆跡, 書法, 文字  
He writes a good *hand*.
- (3) 容器によって内容を表す場合。
14. [card]  
持ち札, 手  
He held a good *hand*.

ここではカードを持つ〈手〉を容器として考える。

上記の意味特徴を, 「手」の機能, 働きに基づいて, プロトタイプに近い順に並べると次のようになる:

[worker]-[expert]-[player]-[saucer]-  
[letter]-[card]

## 5. *hand* とイメージ

人間の手というプロトタイプからメタファー, メトニミーによって色々な具象物に転義, 拡大されていく過程を見てきたが, さらにイメージによって抽象的な意味へと拡大していく。元来イメージと語の意味とは密接な関係があり, サピア (1921) は「語の意味とはイメージである」と次のように言っている:

It is only when these, and possibly other, as-

sociated experiences are automatically associated with the image of a house that they begin to take on the nature of a symbol, a word, an element of a language.

(これら, ならびにそれ以外の関連する経験が家のイメージというものと自動的に連想されるようになってはじめて, それらの経験は象徴つまり, 語, すなわち, 言語の要素としての性格を持つようになるのである)<sup>(6)</sup>

house という語の意味とは house がもつ「イメージ」であると言い切ることに問題がある。何故なら, house のイメージは個人差があるからである。ある人は二階建てのスレートぶきの家を思い浮かべるであろうし, またある人は平屋の瓦ぶきの家を思い浮かべるであろう。しかし, 語の意味はイメージを媒介にして決定されるのは確かである。すべての言語において, 多くの人が共通に持つ「典型的なイメージ」というものがありそれが「語の意味」として定着する場合があるからである。特に *hand* は日本語の「手」と意味を共有することが多いのはまさに英米人も日本人も *hand* (手) から共通のイメージを抱いていることを示すものであろう<sup>(7)</sup>。

*hand* の全体像 [shape] から起こるイメージは手のもっとも基本的な「握る」という機能である。この「握る」という機能から 6. の「所有; 占有; 権力, 権限; 支配, 管理」の意味が派生するのである。この意味特徴を代表して, ここでは [possession] でまとめることにする。同様に [pointer] は「指す」という「指」の機能をからのメタファで, [pointer] から指のもう一つの機能である「手触り」[smooth] がイメージによって派生する。イメージによる具象物から抽象物へのその他の派生は次の通りである。

- (1) [shape] → 「握る」 → [possession]
- (2) [pointer] → 「指し示す」 → 「指」 → 「手ざわり」 → [smooth]
- (3) [measure] → 「掌の幅」 → 「たたく」 → [applause]
- (4) [direction] → 「位置」 → 「左と右」 → 「傾向」 → [tendency]

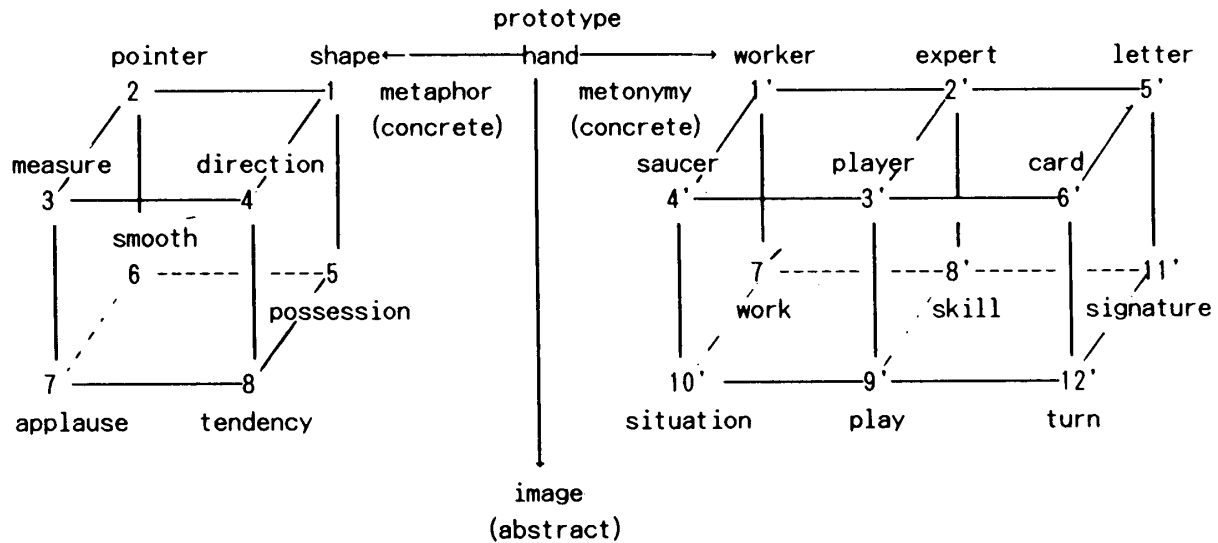


図1. Handの意味構造

- (5) [worker]→「仕事する人」→「仕事」→[work]
- (6) [expert]→「専門家」→「技術」→[skill]
- (7) [player]→「トランプをする人」→「遊び」→[play]
- (8) [saucer]→「情報を握る人」→「強い立場」→[situation]
- (9) [letter]→「筆跡」→「署名」→[signature]
- (10) [card]→「カードをきる」→「順番」→[turn]

## 6. 結 論

これまで hand (人間の手) というプロトタイプから、メトニミー、メタファ、イメージのストラテジーを用いて色々な意味に派生、拡大していく過程を見てきた。辞書的な意味の配列の仕方ではなく、これらの意味どうしの関係が分かるように図示することにする。

中心にプロトタイプの hand がくる。水平方向の左右に、それぞれメタファメトニミー、の具象の座標軸をとる。垂直方向にイメージの抽象の座標軸をとる。各意味特徴の番号はプロトタイプからの距離を表し小さい番号ほどプロトタイプから近いことになる。

## 注

- (1) W. Sorell, *The Story of the Human Hand* (London: Lowe & Brydone, 1968), p. xvii
- (2) 盛岡大学英米文学科3年の英語学コースの学生40人に典型的な「野菜」「鳥」をそれぞれ一つづつあげてもらった。結果は唾の通り。  
野菜: にんじん(16) キャベツ(14) トマト(12) レタス(7) ほうれん草(6) キュウリ(6) ピーマン(4) 大根(4) セロリ・ジャガイモ・玉ネギ・かぼちゃ・白菜(各1)  
鳥: ハト(17) スズメ(15) カラス(13) タカ(10) ワシ(6) にわとり(5) ツル(3) ツバメ(3) インコ(2) キジ・ヤンバルクイナ・セキレイ・白鳥・ペリカン(各1)
- (3) G.A. Miller. *Semantic Relations among Words* In M. Halle. et al eds. *Linguistic Theory and Psychological Reality*. (Mass: The MIT Press, 1978)p. 102
- (4) S. Ullman, 1961. "Semantic Universals." *Universals of Language*. Ed. J.H. Greenber (Mass: The MIT Press) p. 241
- (5) G. Lakoff. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things* (Chicago: The University of Chicago Press) p. 19-20
- (6) E. Sapir. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc.) p. 11-12
- (7) T. Hikage. 1987. *Study in the Semantic Structure of the Polysemic Words* 湘南英語英文学研究(17巻7号)

参 考 文 献

1. M. Johnson. 1987. *The Body in the Mind : The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reasoning* (Chicago) (菅野盾樹他訳 紀伊國屋書店)
2. 市川 浩 1992. 『精神としての身体』勁草書房
3. 田中茂範編 1987. 『基本動詞の意味論—コアとプロトタイプ』三友社
4. 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』講談社
5. 佐藤信夫 1981. 『レトリック認識』講談社
6. 佐々木正人 1994. 認知科学選書 15『からだ：認知の原点』東京大学出版
7. 佐々木正人 1994. 『アクティブマインド：人間は動きの中で考える』東京大学出版
8. Lakoff. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things* (Chicago) (池上嘉彦他訳, 紀伊國屋書店)
9. G. Lakoff and M. Johnson 1980. *Metaphor We Live By* (Chicago) (渡辺昇一他訳, 大修館)
10. 尼ヶ崎彬 1991. 『ことばと身体』勁草書房
11. M. Posner. 1989. *Foundation of Cognitive Science* (The MIT Press) (佐伯 胖他訳産業図書)
12. R.W. Langacker. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Stanford Press)
13. W. Sorell. 1968. *The Story of the Human Hand* (London: Lowe & Brydone)
14. S. Ullman. 1961. "Semantic Universals." *Universals of Language*. Ed. J.H. Greenberg (Mass: The MIT Press)
15. 稲村松雄編 1989. 「小学館ランダムハウス英和大辞典」小学館